

21 背筋伸ばして老いたい

——読者からの激励に応じて——

——入院中にて、手も足もこのようにやっと字がかける状態。もちろん、おむつのお世話になっていきます。多い時は十回ほど、そのつどかえてもらっています。新聞にお書きのように、一日五回だけとか決めてしまっていると本当にかわいそうですね。自分がこのような立場になって初めて分かりました。「おむつは命」と声を大にして皆様に言っして下さい。私の小さい一言ですが、応援しています。がんばって下さい（宮崎医大病棟・後藤幸子さん）。——

不自由な手でつづられたこのお便り、わが胸を熱くします。卑小なれど闘志

静かに燃える思いです。ご覧の通り、私の主張は福祉のうえでも少数派。

春風や闘志抱きて丘に立つ——高浜虚子が俳諧の危機に当って、論敵に対しその復興を宣言した時の句です。

床ずれの夫を悲しむ老婦人（福岡市・柴田こう子さん）からは、「地獄に仏の思いでこの記事（毎日新聞連載中の「おむつは命」）を持って病院にかけつけ、それを添えて嘆願書を……」と。つらいお便りです。

老人ホームの高齢者から二通。「お書きになっている内容はよく分かります。記事は事務室から回覧されてきます」（豊前市亀保の里・宮地政子さん）。骨折で苦しむ和歌山・矢倉房枝さん「看護婦に根性がないと叱（しか）られながら終日、横になっていると、特にどの文章も心にしみ入ります」。

「おむつは命」の章に一番多くの反響がありました。「みな、やる側の都合ばかりで、受ける側のことを考えていない」（群馬大・永杉名誉教授）。まことに至言です。

「福祉聖職論」にも多くの反響がありました。聖職にあらずといった厚生省の

課長さんから、「双方の考えにそう違いはないと思う。私の思い上がりを指摘され反省している」。

「福祉職は聖職。それは日夜、献身的に働いている職員への感謝の表現。厳しい実践からにじみ出た言葉」（那覇市、元校長・安里盛市さん）。佐賀県天寿荘諸隈園長「人間性をもって人間を援助するなら当然聖職意識が芽生える」。

某省元課長（東京）——かつて問題になった元老人福祉課長と同様、官僚のおごりを感じる。どうして価値観にまで公務員が介入するようになったのか。

一通を除き、すべて激励のお便りです。そのうちから全般的な講評を二つ。

『終わりよければ……』は、人間の見事な終焉（えん）を彩るにふさわしい大切な命題です。文中の心の背筋をちゃんと伸ばしている高年の姿こそ老いゆく私たちの理想です（大分市・甲斐公典さん）。

福祉専門の某記者（東京）——現場の強さ。お年寄りに寄せる熱い思いを改めて教えられた。

二つのご高評とも過大な評価です。私はおむつや床ずれに苦しみ、ばけに混

乱する最も弱い立場の高齢者にだけ視点を置いて報告してきました。しかし、ごく少数の例外を除き、ほとんどの高齢者はやがて弱い立場になります。フランスの傑出した女性思想家・ボーヴォワールは、「われわれの文明は老人を単なる屑（くず）、一個の廃品としか扱っていない」「この体制をそのままにして、改良などでお茶をにごすな」と、全人類に訴えました。

しかし、そのことをあざ笑う世の指導者顔をした人たちにもいるのです。デーケン著『第三の人生』（南窓社50年）に寄せて曾野綾子氏が言う。「あちこちに、要求することだけが生きがいになった」おもらい老人。老人であることが「資格であり職業になった老人」がふえつつある」と。

なんとという不遜（そん）。なんと過剰なる体制擁護の言葉だろう。高齢者の小さな幸せの確保のためにさえ、この国の政府に対し、私たちは何と多くの要求をしなければならないことか。

「国民の終わりよくなければ、国は亡ぶしかない」。若き記者（北九州市）がこの連載に寄せた言葉です。